

漢語文芸資料の翻訳論

研究代表者 橋 谷 英 子

橋谷は、中国舟山において、李三娘（白兔記）の木偶戯を上演してもらい、その上演テキスト全六段十二時間分のうち、五段分を地元研究者の協力を得て、文字化した。特にアドリブの語りの部分は、完全に現地の言葉で語られるが、日常生活を反映した興味深い表現が多々見られる。これらを言葉の内容も残した上で、リズムのよい日本語にどのように訳すのか、いわゆる方言の翻訳は可能なのか、を探るのが今後の課題である。

兎玉は、『樂書』のテキスト整理と分析作業を継続している。「論語訓義」部分の注解作業が終わり、「孟子訓義」の分析をおこなっている。成果の一部を「陳暘『樂書』研究（二）」として公開した（2004年12月）。あわせて「校勘記」等を作成し、成果をインターネット上で公開する作業を継続している。

玄は漢訳仏典資料に見られる俗語の出現状況を調査し俗講のテキストとされる変文資料中の用語との関連を見ることで、難解な仏教教理を民衆に理解しやすい形で紹介するための翻訳技巧の現状を明らかにすべく基礎作業を行った。俗講から通俗文芸へと移行する際に用語の上でどのような変化が見られるかを明らかにすることが今後の課題である。

田口は、「マッテオ・リッチの記憶術－『西國記法』訳注（一）」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第115輯21～61頁）を発表した。明代中期に中国に布教に赴いたイエズス会士、マッテオ・リッチが、自らの記憶術について記した書『西國記法』の訳注の制作を通して、西洋人の中国文化の受容過程を考察したものである。リッチの使用した故事の出典、西洋記憶術の歴史におけるリッチの記憶術の位置づけ等を注した点に特徴があり、西洋・東洋の文化的懸隔を如何に埋めようとしたかの一つの具体例を提示した。